「色のユニバーサルデザイン」を知ろう

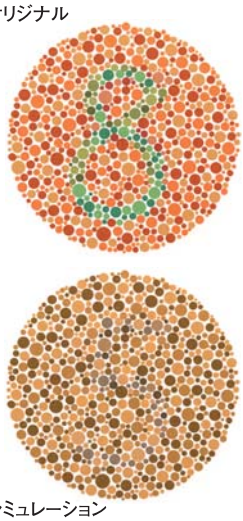
▶「色のユニバーサルデザイン」とは

1

ユニバーサルデザインとは年齢や身体能力に関わりなく、すべての人々に適合するデザインで、バリアフリーデザインと同様に大切な考え方です。今、私たちのまわりでも住まいはもちろん、家電製品、日用品、ファッションまで幅広く広がっています。

その中でも私たちが提案しているのが色のユニバーサルデザイン。色の識別に不自由な人にも、加齢による低下が進んだ人たちにも見やすく、分かりやすい表示を心がけています。

オリジナル



シミュレーション

「学校用色覚異常検査表（株）半田屋商店」抜粋

色覚異常とは◀

2

色覚異常者とは左にあるような数字の8が下のように見えにくくなってしまう人のことです。このような異常を持つ人が男性では20人にひとり、女性では500人にひとりの割合であなたのそばにいます。日本全体でみると320万人です（身体障害者は350万人）。色覚異常者以外にも年齢とともに色覚の機能は低下します。特に高齢者に多い白内障になると色覚機能はより低下します。

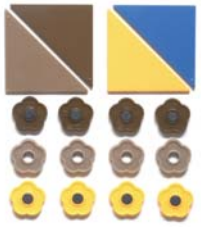
これからは印刷物やワープロ文書、ホームページで安易に色をつけず、「識別しづらいな。」と感じる人がいることを考えて製作しましょう。

▶色覚異常者にどのように見えるか

3

色覚異常者の多くは「赤と緑」の識別が苦手です。右の写真は小学生が使う「算数セットの色板とおはじき」です。このような色の見え方をしているのに「赤だけを集めて下さい。」と先生に言われて困っている子供がいるはずです。「色覚障害のない人によって作られた色名で事物を指示され、集める色を間違え、クラスメイトに笑われ算数が嫌いになる。」そんな可能性もあるはずです。見直さなければならないものが沢山ありそうです。

オリジナル



シミュレーション

学校教材.com（ドージン図書）製品

今、「色のユニバーサルデザイン」がなぜ重要か

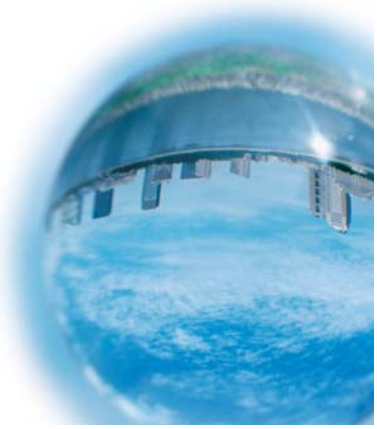
►社会は昔より暮らしやすい？

1

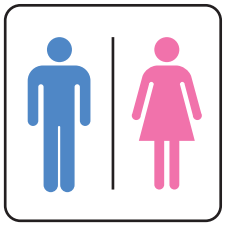
近年、技術の進歩により、数年前まで白黒だった新聞、雑誌などの印刷物や、コンピューター、携帯電話などの画面が、みるみるカラーに置き換わっています。

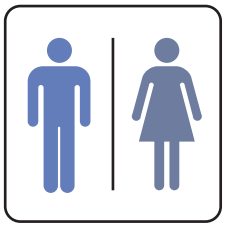
ところが、これらの中には、色づかいの配慮に欠けるものが多く、色覚異常者が不便を感じるケースが増えています。

これを解決するのが「色のユニバーサルデザイン」です。色覚異常者に配慮する事で、すべての人に分かりやすく情報を伝える事が可能となります。



オリジナル





シミュレーション

不自由な場面❶. 淡い色同士の識別 ◄

2

近ごろ室内環境の調和のために、案内表示に淡い色が好まれて使用されます。しかし、淡い色は彩度が低くなっているために、濃い色に比べ識別がより困難になります。色覚異常者は「赤と緑の識別が困難である。」ことはよく知られていますが、「水色とピンク」も識別が困難です。そのためトイレ案内表示の「男性が水色」、「女性がピンク」の色分けは非常に問題です。男性と女性のデザインが異なっているので「問題なし」と思われがちですが、色覚異常者のなかにも近視や乱視の人がいますので注意が必要です。

►不自由な場面❷. 色だけにたよった表現

3

色覚異常の種類によって赤が暗く、黒のように見える人がいます。そのような人にとって平日が黒色、休日・祝日が赤色、そしてフォント等に変化がないようなカレンダーは、週中の祝日が非常に分かりづらいものになります。

色だけにたよった単純な識別法ではなく、フォントの変化や他の情報を加えることで、平日と祝日の差をつけなければなりません。

オリジナル

4	5	6
11	12	13
18	19	20
25	26	27

4	5	6
11	12	13
18	19	20
25	26	27

シミュレーション

私たちは考えています。色のユニバーサルデザイン

見やすく分かりやすい表示を心がけています。

1. 色の分類だけの表示に、色名もあわせ文字の表記もする。
2. 認識しやすい色の組み合わせで配色する。
3. 色分けに形や線種の変化で判読を容易にする。
4. 背景の色と文字色を考慮する。
5. グラフ表示などには凡例を直接表記するか引出線を用いる。

すべての人に見やすく、読みやすく。

色のユニバーサルデザインで大切なことは、「色覚異常者は男性の20人に1人の割合」と「20人中19人は通常の識別ができる」ということを忘れずに、すべての人に見やすく、そして読みやすくすることです。不特定多数の人が利用する施設は色のユニバーサルデザインの導入が急がれています。道路標識、電車路線図、病院内の案内表示、劇場やホールの案内表示。そして、もちろん各種印刷物も十分な考慮が必要です。

色のユニバーサルデザインの導入には、知識とノウハウが必要です。

色のユニバーサルデザインは通常のデザインに特別なものを持ち込むことではなく、配色やその表現方法を考える事です。しかし、それをメディアにあらわすデザインは色覚異常を理解し、表現の知識とノウハウを身につけなくてはなりません。すべての人にやさしいデザインを目指して、色のユニバーサルデザインを取り組みましょう。